平成 20 年６月１１日

日本学術会議応用昆虫分科会第1 回公開シンポジウム「昆虫が拓く世界−研究者の再結集を目指して−」参加者へのアンケートのとりまとめ

（参加者160 名、回答者98 名；回収率68%、コメント記入者34 名）

日本学術会議 生産農学委員会 応用昆虫分科会
第１回公開シンポジウム事務局

１．参加者の実態

参加者の年齢層は30 代、50 代、40 代の順でそれぞれ20-25%、20 代と60 代が10％台で（図1-1）、広く各年代層にわたっていることが分かる。また、地域別では、約80％と圧倒的に関東地区が多く（図1-2）、開催地が東京という条件を考慮すると妥当だが、全国的に参加者を集める努力も必要かと思われた。参加者の所属は、大学、研究機関とで70％を占め（図1-3）、これらが学会活動の主体となっていることが示唆された。民間参加者が20％あったことは評価できる。所属学会については、昆虫関連が65％と多かったのは当然であるが（図1-4-1）、昆虫関連でみると、多くの回答者が複数に学会に所属しているのが現実で（アンケート生データ）、そのうちでも、応動昆、蚕糸とで47％となり（図1-4-2）、この２つの学会が応用昆虫学の中核となっていることが改めて認識された。

２．シンポジウムの開催意義への理解

今回のシンポジウムを開催した目的、意義である「今後の昆虫学および他分野との連携、昆虫関連研究の再結集」の意図については、十分伝わったものと推察される（図2-1）。それは、昆虫関係研究、教育が抱える問題点について”明確になった“という回答が85％を占めていたこと（図2-2）からも明らかである。そして、昆虫関連学会の再結集に向けた活動を今後も継続する必要性については、ほとんど（97％）の回答者が感じていることが分かる。これらのことから、今回開催したシンポジウムは大いに意義があったものと判断され、今後も引き続きこのような活動を続けていくことが必要である。

３． 昆虫関連学会の実態と問題点

昆虫関連研究・教育の社会的浸透については、肯定的な回答は“普通“を含めても30％弱であり、“あまり”、“ほとんどない”という否定的な回答が約70％をも占めていた（図3-1）。このことから、我々が日常で漠然と感じている、「昆虫関連研究・教育はあまり社会に浸透していないのではないか」という認識が改めて確認された。その上で、昆虫関連研究について、異分野との交流・融合を図る必要性をほとんどの参加者が実感していることが分かる（図3-2）。また、学会自体が抱えている問題点としては、会員の減少、予算不足を多くの参加者が感じている（図3-3）。

結論として、今回、我々が提起した“昆虫学連合の構築”については、“大いに賛成”および“やや賛成”が89％を占め（図3-4）、昆虫学連合構築の必要性を大部分の参加者が感じていることが示唆された。

４．　コメントの分析

コメントは回答者の約３分の１にあたる34 名からいただいたが、それらは多岐、様々であった。しかしながら、基本的には１～３の回答結果の内容がよく反映されているものと判断された。

昆虫学連合の構築については、「昆虫学の分野・領域は多様であり、連合を組むとしても緩やかなものが望まれると」いうのが共通認識であることが伺えた。また、昆虫学が一般社会的にも隔たりがあることを踏まえ、「昆虫連合の必要性とともに、昆虫学以外の分野への働きかけの必要性」が指摘されている。一方で、昆虫学連合の構築に当たっては、「個々の学会の独自性を尊重することの重要性」が指摘され、「連合の利点、不利益点をしっかり摘出、論議したほうがいい」というアドバイスもあった。

以上

公開シンポジウム

「昆虫が拓く世界−研究者の再結集を目指して−」:アンケートのお願い

平成20年5月16日

応用昆虫分科会事務局

当応用昆虫分科会では、応用昆虫学、昆虫科学のさらなる発展のため、昆虫関係研究者の再結集を目指しています。つきましてはアンケートにご協力ください。

1. ご自身についてお答えください。

(1)年齢

□20歳未満　□20代　□30代　□40代　□50代　□60代　□70歳以上

(2)地域

□北海道・東北　□関東　□中部・東海　□近畿・中国　□九州　□その他

(3)所属

□大学　□研究機関　□民間　□学生　□その他

(4)所属学会(複数回答できます)

□昆虫関連学会((↓ 以下をマーク)　□昆虫関連関以外(　　学会、　　学会)

□日本衛生動物学会　□日本応用動物昆虫学会　□日本環境動物学会　□日本昆虫学会　□日本蚕糸学会　□日本農芸化学会

□日本農薬学会　□日本鱗翅目学会　□日本蜘蛛学会　□日本ダニ学会　□日本野蚕学会　□その他

2. 今回のシンポジウムについてお答えください。

(1)昆虫関係研究者の再結集という、主催者側の意図が伝わりましたか。

□大いに　□やや　□あまり　□ほとんど

(2)昆虫関係研究、教育が抱える問題点が明らかになったと思いますか。

□大いに思う　□やや思う　□そうでもない　□全く思わない

(3)昆虫関連学会の発展のためにこの種の活動を進めていく必要があると思いますか。

□大いに思う　□やや思う　□そうでもない　□全く思わない

3. 昆虫関連学会の現状について考えをお聞かせください

(1)昆虫関連研究や教育は社会にどの程度浸透していると思いますか。

□かなり　□やや　□普通　□あまり　□ほとんどない

(2)昆虫関連研究と異分野、境界領域研究の交流、融合の必要性について

□強く感じる　□やや感じる　□特に感じない　□まったく感じない

(3)ご自身が所属している学会が抱えている問題点は何ですか(複数回答可)。

□予算不足　□会員の減少　□競争的資金がとりにくい　□その他 (　　)

(4)昆虫学連合についてどうお考えですか。

□大いに賛成　□やや賛成　□特に関心なし　□やや反対　□反対

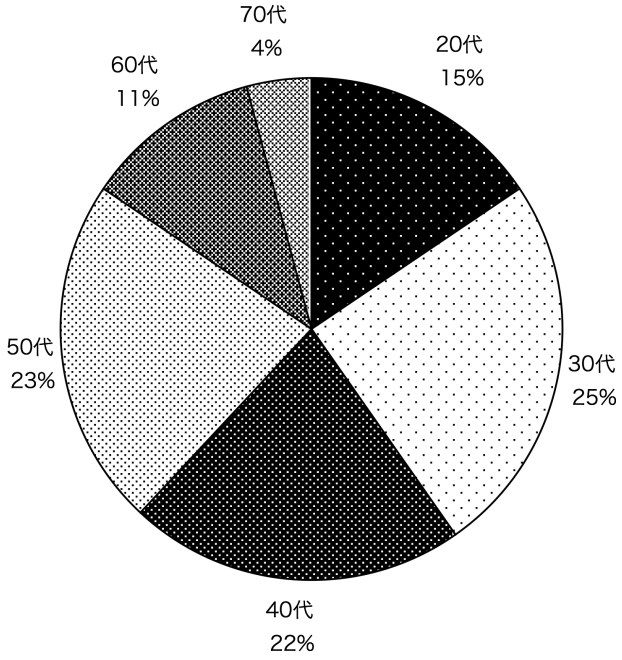
4. わが国における昆虫関連の研究や学会などについて感じていることがありましたら、ご自由にお書きください。

(　　)

ご協力ありがとうございました

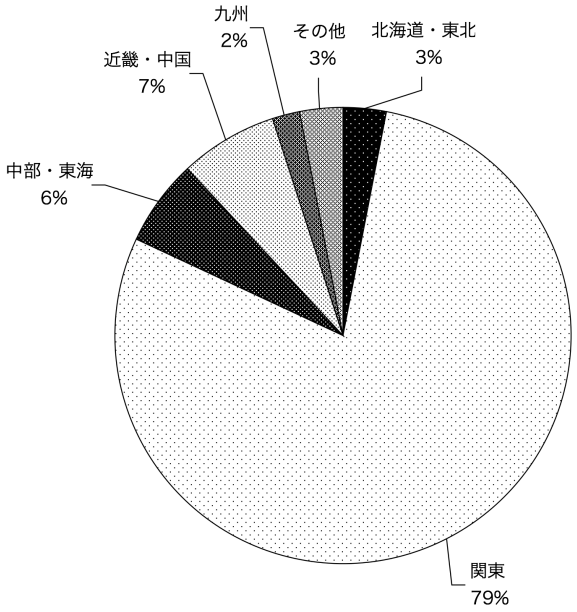
回答数:98

1-(1)参加者の年代



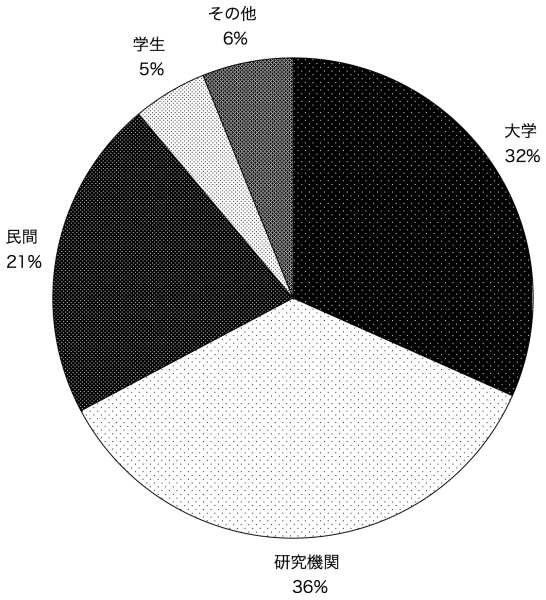
回答数:98

1-(2)参加者の地域別



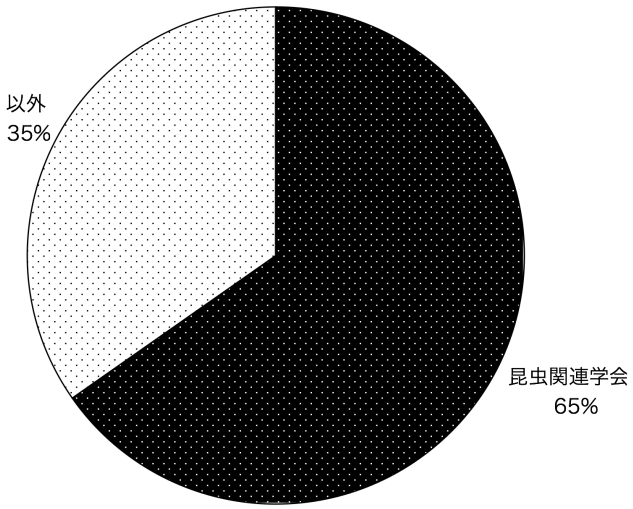
回答数:98

1-(3)参加者の所属



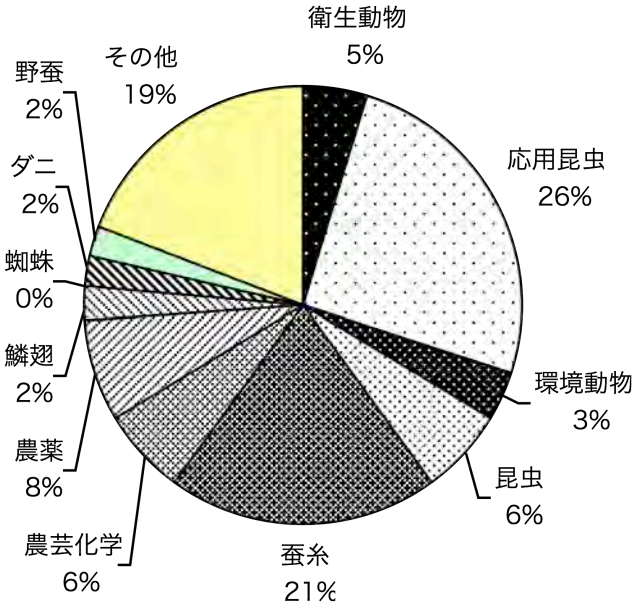
回答数:98

1-(4)参加者の所属学会(1)



回答数:173
（複数回答）

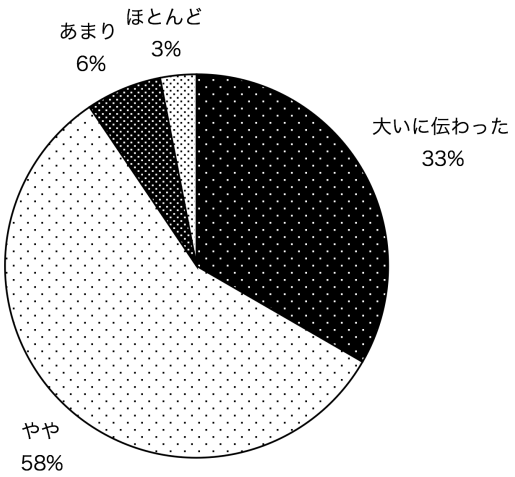
1-(4)参加者の昆虫関連所属学会（2）



回答数:96

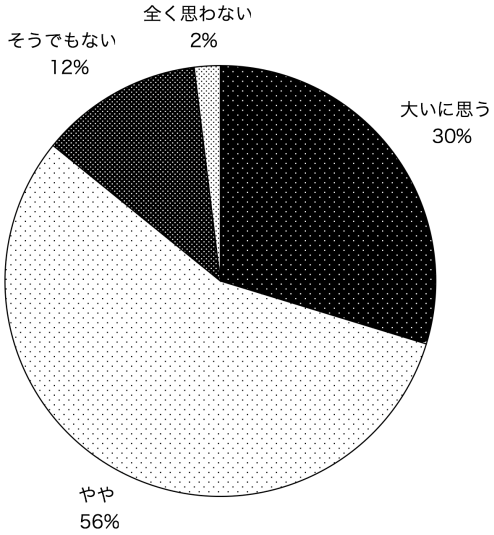
2. シンポジウムについての印象

(1)昆虫関係者の再結集という意図が伝わったか？



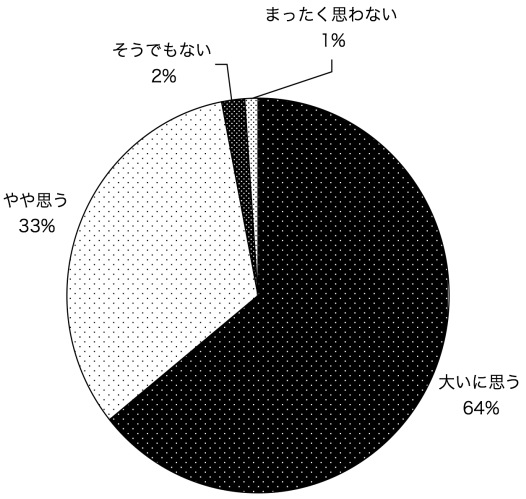
回答数:98

(2)昆虫関係研究、教育が抱える問題点の明確になったか？



回答数:98

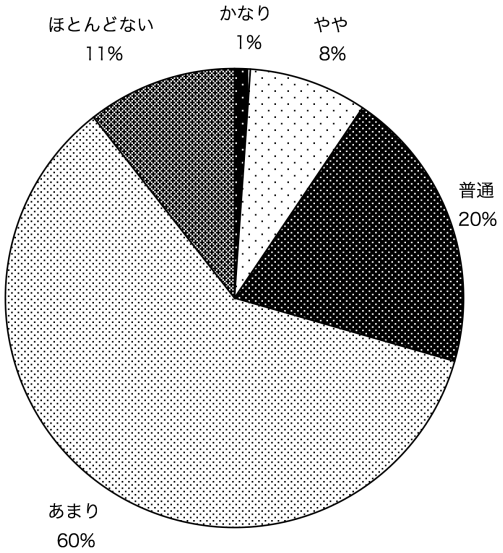
(3)この種の活動を継続する必要性についてどう思うか？



回答数:95

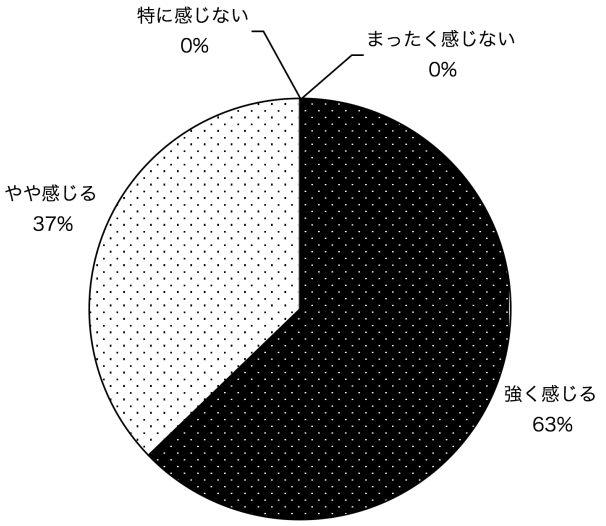
3. 昆虫関連学会についての考え

(1)昆虫関連研究や教育の社会への浸透



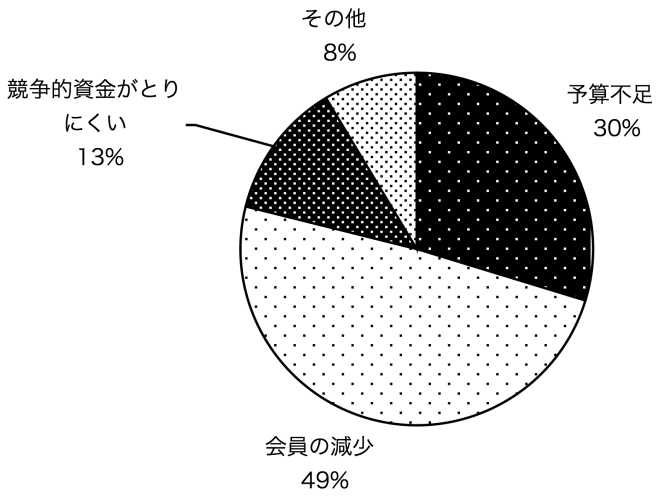
回答数:94

(2)昆虫関連研究と異分野との交流・融合の必要性



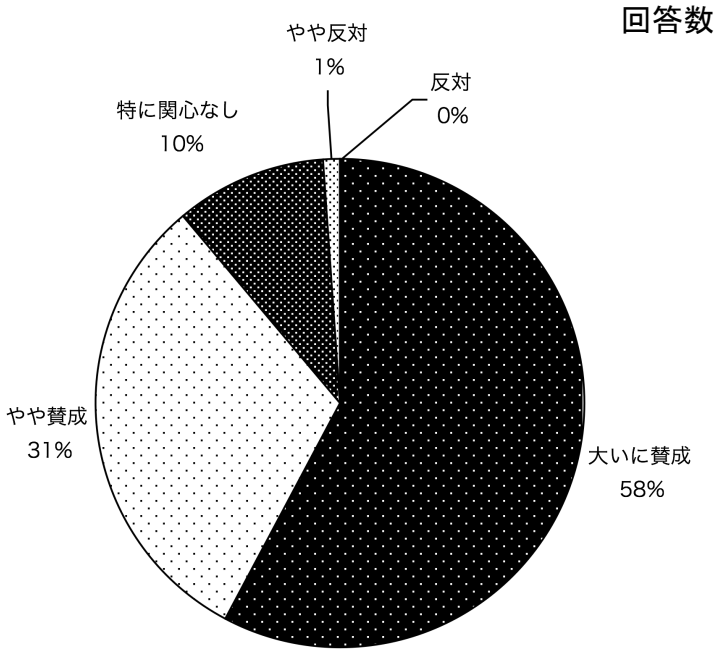
(3)所属学会が抱えている問題点

回答数:118
（複数回答）



(4)昆虫学連合についての賛否

回答数:90



日本学術会議応用昆虫分科会公開シンポジウム
「昆虫が拓く世界-研究者の再結集を目指して-」アンケート意見

平成 20 年 5 月 16 日

参加者：160 人
アンケート協力者：98 名（回収率６１％）
コメント記入者：34 名

１．大学において、昆虫を中心としている学科がとても少ないと思う。昆虫に興味のある若者は少なくないと思うので、そのような学科が増えれば各学会の若手会員も増えるのではないか。　（無、20 代未満）
２．若い人の会員が少ないのは、このような学会の存在を知る機会が少ないからなのかも知れないとおもいました。就職が難しいというのもあるかも知れないです。
（無、20 代）
３．個々の学会単位でなく、より強い連携や統合する必要があると思う。
（応・環・蚕・鱗、50 代）
４．自然科学、基礎学問としての分野と応用（環境保護を含む）分野とのギャップがある。（蚕・化・他、40 代）
５．学術的な意味で連合を進め、アマチュアレベルの集まりは別途自然発生すると考える。（応・環、30 代）
６．昆虫関連の研究が社会産業にどう貢献していくのかを、アピールした方がよい。
（他、40 代）
７．細分化されすぎている、という印象を持っております。　（応、40 代）
８．若手研究者間の異分野交流を促進するようなセミナー、研修などの開催、奨励制度の制定などに積極的に取り組んでほしい。シンポ参加者の年齢構成が高すぎる。もっと若年の参画を促さないと絵に描いた餅どころか、餅の絵すら描けないのでは。ボトムアップが必要不可欠。　（応・昆、30 代）
９．利用・応用しやすい昆虫機能研究やゲノム研究以外の、特に、分類、生態、自然史的昆虫学はより一層、認められなくなると思われる。もともと日本は、ナチュラルヒストリーの層がうすいが、こういったことはアマチュア、愛好者を中心とした学会、研究会のレベルで対応して欲しいということなのか。
日本農芸化学会の昆虫研究の現状と課題より、日本生態学会の方が昆虫研究の比率が高く重要と思われる。若い研究者の育成や将来設計のできるポストモデルを考えるべきではないか。既に「自然史学会連合」という組織があるが、具体的な活動はしているのですか。学会によってレベルも方向性もかなり異なること、基本的には競争原理的な世界を学会で連合しても意味はあるのでしょうか。　（衛・環・他、50 代）
10．蚕糸学会などこれまで問題解決型の研究集団から昆虫機能の利用など、新しい分野に向けて創造的研究開発を図る方向などについて積極的に民間企業などへ、提案すべきである。また、昆虫に興味を持つアマチュア集団をどのように取り込むか（新学会員の確保）について活動すべき。米国では博物館を利用して、昆虫仲間と日頃の成果などで交流して

いる。このような市民に開かれた学会活動もやったらどうか。（蚕、60 代）
11．分類学が弱体。文科省に昆虫学の重要性を認識させるべき。一般市民への昆虫学（ムシ）普及活動。　（応・薬、70 代）
12．分野が偏る。若手が出てこない。興味の分野がかれる。他の専門学会へシフト。
（応・ダ、30 代）
13．昆虫関連学会が対象としている分野、領域が多様であることがよくわかった。連合は緩やかなものでないと成り立たないと思った。　（応・蚕、50 代）
14．昆虫の研究が社会に貢献できるということが、社会に示せていない。あるいは、いまだ貢献が少ない。　（蚕・他、30 代）
15．子供への教育という面での活動が重要だと思いますが、十分ではないと感じます。
（衛・応・環・化・薬・他、30 代）
16．意図が全くみえない。　（無、50 代）
17．一般市民や社会から隔離している。この状況は他の学術領域に対しても該当する。そのため、昆虫などの連合体としての議論は大いに重要だが、昆虫学以外への働きと共感を得ることも重要である。　（化・薬、70 代）
18．昆虫は害虫としてとらえられるケースが多いが、重要な生物資源として保存していくことに、もっと力を入れていくべきだと思います。連合にはもちろん賛成ですし、そういった場で議論してほしいと思います。　（化・他、50 代）
19．教科書的な書籍がない。ショウジョウバエのコミュニティを取り込んでいない。出版物へのアクセスは、近年とても容易になった。学会の口頭、ポスター発表のレベル、企画力を上げていかないと、学生にとって学会費は学会発表する権利を得るための料金に過ぎなくなっていく。　（蚕・他、20 代）
20．連合することのメリット、デメリットをもう少し抽出、整理した方がよいと思う。
（衛・環・ダニ、40 代）
21．昆虫関連諸学会の関係がばらばらでお互いの利点が生かされていない。
（応・蚕・他、60 代）
22．各学会、他業界との共同研究連携強化の中で、社会貢献の視点の重要性を感じた。
（蚕、50 代）
23．他の加入してない学会発表で聞きたい講演があったりする。合同の学会が企画できればいいと思う。　（蚕・化・他、40 代）
24．生物に多様性があるように、学会にもそれぞれの特徴があるのはよいこと、そのよさを、なくすような連合には賛成できない。よいところを残しながら、新しい目標をつくるようなことが望ましい。何を残し、何を新しく作るか、企業の組織改革時にいつも考えること、失敗すると、10 年の損失につながる。　（薬、50 代）
25．２と３は植物学会や植物生理学会を参考にして、ポスドクが自薦で応募できる若手奨励賞を作った方がよい。　（応・昆・ 他 、30 代 ）
26．昆虫学を学ばず、大学以降昆虫を扱う人々は多く、またその業績は昆虫学発展に資している。（例、フェロモン合成者）彼らは、Entomologists ではなく、entomology 学会のアウトサイダーと感じている。日本昆虫科学連合とすれば、また Entomological scientists と呼ばれれば、インサイダーとなるであろう。Entomological sciences　（化・薬、70 代）

27. 連合を作ることを検討される際、統合を達成したり、検討したことのある学会の例（文系、海外のも含めて）を情報収集されてみてはいかがでしょう。　（応・昆、30 代）
28. 細分化していると思う。昆虫学を始めるにあたってどの学会入ったらよいのかわからないし、いくつも入るにはお金がかかりすぎる。　（応・他、30 代）
29. ICE について、2012 年（次回大会）は韓国とアメリカが手を挙げていますが、その生の 2016 か 2020 に再度（40 年ぶり）日本で、ということを結束の一つのきっかけにすることも考えてみては？韓国はこの招致があるにしても、子供たちも巻き込んですごい熱意で、考えさせられてしまいます。誌名を Asia Pacific Entomology としている視点も。
（応・昆虫、60 代）
30. 教育に力を入れるとしたら、細分化したらおもしろみが薄れると思う。（他、20 代）
31. 今回のテーマの「再結集」の「再」がよくわかりませんでした。かつて昆虫連合が存在したのでしょうか。　（応・蚕・他、50 代）
32. 学会の合併促進に向けての方策（奨励援助金など）が必要。今回のシンポは興味深く、意義深かったが、昆虫分類学会を招かないなど、多様性解明への視点に欠けていた。
（応・環・昆・他、50 代）
33. いくつかの学会は合同大会が可能と思う。学生にとってもメリットは大きい。たまに合同のシンポジウムをやるといいと思う。　（応・化・薬、50 代）
34. 分野の重要なことを仲間うちで確認し合っているだけでは不十分で、他の学問分野の方、研究者以外の方、社会全体に理解して貰うことが必要。　（衛・応・ダニ、60 代）

※かっこ内の略号は以下の所属と年代を示す。
衛：日本衛生動物学会
応：日本応用動物昆虫学会
環：日本環境動物学会
昆：日本昆虫学会
蚕：日本蚕糸学会
化：日本農芸化学会
薬：日本農薬学会
鱗：日本鱗翅目学会
蜘：日本蜘蛛学会
ダ：日本ダニ学会
野：日本野蚕学会
他：昆虫関連学会その他
外：昆虫関連学会以外
無：学会に無所属